

東北復興 PSW にゆうす

☆新たな年度の重点取組「ほっとミーティング」を、最前線の各地にて開催してまいります☆

被災地にて暮らし、休む暇無く日々の実践に励む現地 PSW の仲間たち。その労をねぎらうと共に「体験と想いと知恵の分かち合い」のための自助グループの如き場面です。現場実践に根ざした意見交換を積み上げることを通して、本協会復興支援本部の取組が、一層、現地ニーズに即したものとなるよう目指してまいります。併せて、貴重な語りの一言一句とその込める想いをも、全国各地の仲間に向けて発信してまいります。負うた傷跡のままに終わらない日々を今なお歩み続ける仲間に、力の限り心と力を寄せ続ける私たちでありましょう。小関清之



「ほっとミーティング in 石巻」開催

1月26日（土）に石巻市内で地元の精神保健福祉士、宮城県精神保健福祉士協会役員、復興支援本部員など計10名が参加し、「ほっとミーティング in 石巻」が開催されました。「現地の仲間の声を聴き、ともに悩み、考え、現地の仲間が孤立してしまわないように」という想いを秘めながら様々なお話を聴いてきました。今回はその様子を中心にお届けします。

ありがとう復興支援



1月26日比較的積雪の少ない宮城県沿岸部の石巻地域でも数センチの雪が積もる中、和やかな雰囲気でのミーティングが開催されました。紙面の関係上、すべてをご紹介することはできませんが、参加者の中から出た話の中で、印象に残ったものをご紹介します。

- 経験が浅いなか震災関連の相談も多く、“身体疾患”について覚えないうけないのが大変。どのように学んでいったらよいのか…。
- 実際に対象者と色々な経験をして初めて手続きを学んだ。知識として知っていることが大事ではなくて、相談があったときにワーカーがどのように応じていくのかが大切。
- 事業所の相談件数と主訴のデータをみると、不眠の訴え、抑うつ、不安、恐怖の順番で続いている。
- 緊急度の高いケースは保健所が中心となって対応している。継続ケースで緊急度の高い人はケア会議等を保健所や病院で実施している。支援はやはり人。話を聞いてもらえる人が欲しい。
- 自分たちの役割はソーシャルセフティーネットのひとつ。
- 震災後、ずっとノンストップな感覚
- 病院のスタッフとして、病院を維持経営しながら、自分自身の被災と対峙した。電気も水道もなく、スタッフもいないような状況で業務をこなしていた。職員も被災者。交代で職場を抜けて、親兄弟を探し、また職場に戻ってくるといった日々が続いた。現在もオーバーベット、段々と震災当時入院された方々も退院し始めているが、戻り先がない方も多い。家族の方々も被災しており、仮設住まい。仮設住宅にはとても戻れない。石巻管内は老人ホームもフル稼働状態。関心を持っていただいて感謝している。その分、こちらが側も情報を発信しなければならない。他も情報を発信してもらえればありがたい。

～参加者で作り上げた温かな雰囲気の中で交わされる、真摯かつ、時に穏やかに、時に言葉を詰まらせながらの貴重なお話を聴き、改めて関心を持ち続けることの大切さを実感しました。今後も各地においてこのような場を継続して開催し、皆さまへ発信していけるよう取り組んでまいりたいと思います～

前回紹介しきれなかった九州沖縄ブロックの方々からの心温まるメッセージをお届けします。

☆マークは県花のイラストです☆ 佐賀(クスの花) 長崎(雲仙ツツジ) 鹿児島(深山霧島)。

☆佐賀県支部長 三根知起



東日本大震災で犠牲になられた方々のご冥福をお祈りするとともに、今なお苦しい状況に置かれている被災者の皆様には心よりお見舞いを申し上げます。佐賀県からも現地で支援に携わった者が数名いますが、大部分は支援したい気持ちがあっても、遠く離れているため現地に行けず無念な思いをしています。現地で支援は困難ですが、佐賀県支部としては、構成員が関心を持ち続けていくよう、研修会の実施や支援募金の呼びかけ等、震災を風化させないための活動を続けていきたいと考えています。現地で奮闘されている精神保健福祉士の皆様の専門職としての力を信じて、被災地の1日でも早い復興を心からお祈り申し上げます。

☆鹿児島県支部長 大津敬



明日はいつもやってくる。いつでも間違えたことはやり直すことができる機会がある。そう信じて暮らしている。明日がいつもの日常と違うなんて、誰も考えずに仕事し毎日をご過ごしている。もしこれがそうでない日が来るとしたら…。それは、どこでも同じ。東北だけの問題ではありえない。それぞれの暮らす地域で予想もできないことが起こる。だからこそ我々は「つながる」必要があるし、その「つながり」を大切にしたいと思っている。桜島の噴煙のように燃えあがるエネルギーが、遠く離れた東北の地に届くように願いたい。

☆長崎県支部長 小森正満



私が大震災を知ったのは、旅先だった。そこは異国の街で、朝食時にホテルのテレビに映し出された仙台平野を真っ黒な津波が全てを破壊し押し流して行く映像だった。自分の目を疑った。

実は、私はその1ヶ月前、目の前の海が突然盛り上がりあつという間に飲み込まれて、必死にもがいて、もがいて、浮かび上がった時、今までいた街は廃墟と化していた。そして、誰もいない。そこで目が覚めた。

とても怖い夢だった。夢の中と同じ光景が眼前のテレビに映されていた。予知夢というものか？

その光景は67年前原爆で破壊された長崎の荒涼たる光景とだぶっていた。

これが生きとし生きるものの宿命なのか。

神は人間に何という辛い試練を与えたもうか。

しかし、被爆後、今後50年は再生しないとされていた爆心地、片足鳥居がある山王神社の一本の楠は辛うじて焼け残り、2年後に新芽を出し、その樹の生命力の強さは被爆者に一筋の希望を与えた。陸前高田市一本松が被災者に生きる勇気を与えたように。

被爆二世の私にとって、今回の大震災と原発事故は他人事とは思えない。今後何年経とうと、被災者の事は決して忘れてたりしない。

今後とも遠く離れた長崎の地からできる限りの支援をしていきたい。

♥～復興支援活動募金報告～♥

1,929,707円 (2012年4月～2013年3月8日現在)
皆様からお預かりした真心のこもった募金は、復興支援に携わる仲間への支援に役立ててまいります。引き続きご協力のほど、よろしく願いいたします。

☎復興支援本部「ほっと phone」

TEL070-6450-2615 小関本部長代行が
お応えします。お寄せいただいた声は、
復興支援に生かしてまいります

☆皆さんからのメッセージを募集します☆

本誌では被災した各地の仲間へのメッセージ及び被災地からの情報発信など、相互交流ができる紙面づくりを目指しております。全国どなたからのメッセージでも構いません。それぞれのお立場からの声をお聞かせください。本誌へのご意見・ご感想も大歓迎です。本紙面にてご紹介させていただきます(個人情報掲載いたしません)。お届け先は下記復興支援本部へのFAXもしくはE-mailにてお願いいたします。E-mail: office@japsw.or.jp * 題名に「PSWにゆうすについて」とご記入をお願いします。

第4号 2013年3月15日発行

発行：(社)日本精神保健福祉士協会 東日本大震災復興支援本部

〒160-0015 東京都新宿区大京町23-3 四谷オーキッドビル7F TEL.03-5366-3152 FAX.03-5366-2993

復興支援本部 URL: <http://www.japsw.or.jp/f-honbu/>